

茶事處句々祖師禪。後微妙公召小松。賜歲祿二百石。又賜居宅於月城。月城は小松城内三丸をいへり。按するに、寛永十九年小松士帳に、二百石三丸千宗室と見ゆれば、利常卿小松城へ養老の時、小松へ召連れられ、城内三丸の地に邸宅を賜はり、爰に居住せしと聞ゆ。然るに萬治元年十月利常卿小松城にて頓に薨逝し給ひけり。依つて翌二年綱紀卿の命により、小松附の諸士悉く金澤へ移住す。宗室も此の時金澤へ來りたるなるべし。寛文十一年の士帳に、百五十石茶堂茶具奉行千宗室歲五十とあり。また元祿元年の士帳に、百五十石千宗室と載せたり。同六年の士帳に、千宗室みそぐら町稻荷橋近所とあり。此は二代宗室にて、小松より移住の時賜はる居邸に相續して居たりしと聞ゆ。葛巻昌興自記に、元祿三年九月十六日今朝於御城會千宗室仍利休門弟之内殊美名之七人之事相尋候處。此事近代人々稱美所也。凡そ當時は大小となく皆以て門弟たる之由。先づ近代稱する七人は、故肥前様・蒲生飛驒守殿・金森法印・吉田織部・高山南坊・芝山監物・勢多掃部、此の通之由也と。又同月廿日の條に、昨日御棚之下板床に塵取・羽ばうき置合様

以醫仕我微妙公。領二百石。良正及晚年復本姓小瀬也。

良正長刀主術。有深痼而諸醫理ヒ剤不起者。良正一撮無不驗焉。時與南保恒德齊名。以故公屢益俸。至四百三十石。又工詩。絢爛之美如霞錦照灼。及其溢鬱頑心魂者。還牽壓俗格也。白石先生與書於鳩巣。累嘉良正才思富蔚云々と。按するに、良正が秀逸の句多き中にも、殊に名高きは海鼠賜詩なり。

天厨臘月進鵝黃。一尺鸞刀欲藏長。獵鼈非關供面藥。龍涎應似賞神香。銀壺凍合酴醿色。玉碗凝成琥珀光。海外由來多美味。肯論公子獨無膾。

又歌學にも志厚く、詠歌世人傳吟するもの少からず。參議中將綱紀卿上洛し給ふ頃、京都の旅館にて月見の御遊ありけるに、良正も伺公しける。からすみにて御酒を賜はり、からすみを題にて詠歌仕れと命ありけるに、取りもあへず。

九重のうちとおもへば所から

すみわたりたる秋の夜の月

また二條左大臣吉忠公、良正が詩を賞美し給うて、詠歌を

之事依被仰付、千宗室に相談、とかく別々に置合様子あるべき品に無之、且又ちりとりと申候間下の方可然、置様は只つい置きたるが可然、左候はゞ(略)如此たるべき歟、右羽之間、壁のかたへ羽のかうをなして置候事、織部流此の分之由申候。右之由申上候處、左之方へは外の品被爲置よし御意に候。重而右の方へ此の通にて置替也。利休は左の羽にかまひなく、いづれとも置候旨申候。ちりとりは桐にて黒ぬり、羽は鷹の羽を竹のかはにて包みたるなりと。

右のやうの事どもを載せたれば、綱紀卿の時茶湯會席の都合等尋ねさせ給ふ事、毎度ありし事知られけり。

○小瀬復庵舊邸

元祿六年の士帳に、小瀬又四郎味噌藏町藤田ト庵隣とあり。延寶の金澤圖を見るに、味噌藏町丹羽織部の後地にて、材木町へ出づる橋爪に、小瀬順理と記載す。

○小瀬復庵良正傳

燕臺風雅に云ふ。小瀬良正字順元。通名以字行。復更復庵號桃溪。良正四世祖阪井就安。我儒官小瀬甫庵嫡男也。嘗阪井下總養爲子。故冒姓阪井。事詳白石紳書。就安慶長甲寅

賜ひけり。其の歌。

名に高き高麗もろこしの國までも

つたへて仰ぐ言の葉の色

此は良正が朝鮮人來朝、彼の學士と唱和の時賜へりとぞ。又良正五十歳初度の誕辰を賀し給ひ賜へる歌。

三千とせになるてふ桃の溪かけに

老いす死なずの葉もぞある

良正此の祝歌の語に據つて桃溪の號を稱すとも、又桃溪の號に據つて詠吟なし給へるともいへり。さて享保八年二月武州江戸に在府しけるに、頓に病痼にかかり、府を發出して金澤へ歸らんと、北陸道の逆路に赴きけるに、越後國名立の驛舍にて歿す。享年五十歳。

終焉作

事親年更短。報主日非長。半百人如夢。落花芳草傍。

發句

ひらけても心の花も名残かな

○大鋸屋町

味噌藏町より淺野川橋場町掛作へ出づる口也。此の町名